日本雪工学会誌
J. of Snow Eng. of Japan
Vol.38 No.1, 23-26, Jan. 2022

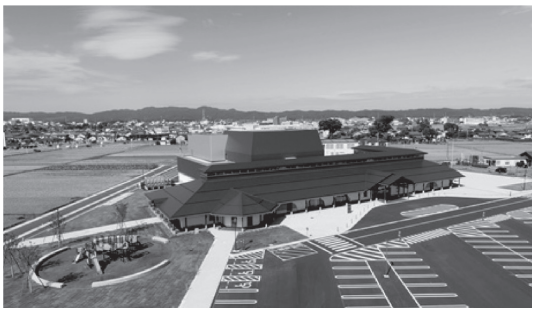
第36回雪シンポジウムin五泉　開催報告
Report of the 36th Snow Symposium in Gosen

富　永　禎　秀[*1]・瀬　戸　民　枝[*2]
Yoshihide Tominaga　　Tamie Seto

1. はじめに

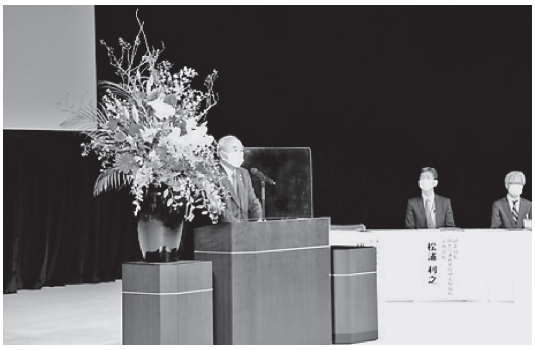
「雪シンポジウム」は，雪国の安心で豊かな暮らしの創造を目指して，新潟県内各地の自治体が抱える問題を民・産・学・官が一緒に考える機会として，本会上信越支部と県内自治体とが共催で開催しているもので，今年で36回目を迎えた。本年は，良質で豊富な水資源に恵まれ，古くから絹織物の産地として知られており，現在ではニット産業で全国的に知られる五泉市での開催となった。言うまでもなく，この豊富な水資源を産み出してくれる要素の一つが雪である。昨年は，別の自治体にて開催の準備を進めていたが，新型コロナウイルスの感染拡大状況が見通せないことから，協議の末，中止となったため，１年ぶりのシンポジウム開催となった。今回のシンポジウムは，「美しき雪の恵み」をテーマとして，雪による恩恵に焦点を当てた。

シンポジウムは，令和3年11月10日（水）に，同年10月にグランドオープンしたばかりの五泉市交流拠点複合施設「ラポルテ五泉」多目的ホールを会場にして開催され，座席間隔の確保，換気，検温，消毒など新型コロナウイルス感染症対策を十分行った上で，オンライン（YouTube配信）でも視聴可能とした。当日は，多くの業界関係者，行政担当者，市民等の参加を得て，会場200名，オンライン46名が参加し，大変盛況であった。最初に，酒場詩人としてTV番組でも人気の吉田 類氏により「酒場詩人のススメ」と題する基調講演が行われた。続いて，「美しき雪の恵み」と題するリレートークが4名の講演者を招いて行われた。以下，講師の方々にご執筆いただいた予稿集の原稿を基にその一部を紹介する。



会場となったラポルテ五泉

会場内の様子



伊藤勝美市長（実行委員長）の開会あいさつ

＊1　新潟工科大学（上信越支部・支部長）
＊2　新潟県糸魚川地域振興局（上信越支部・副支部長）

2．基調講演「酒場詩人のススメ」

講師　吉田 類 氏（酒場詩人）

五泉市はニットや絹織物で有名だということは知っていた。私は黒い洋服が中心なので，いつも同じものを着ていると思われるかもしれないが，こだわりがあり，素材やテクスチャーが微妙に違う凝ったものを選んでいる。そんなことから，五泉のニットや絹にはとても興味があった。絹織物には良質で豊富な水が欠かせないそうだが，私が「清らかな水の恵み」から連想するのは，やはり“日本酒”。山紫水明の新潟県は，川や伏流水，山からの雪解け水で美味しい米が育ち，旨い酒が醸される素晴らしいところ。五泉市の地酒，近藤酒造さんの純米吟醸酒「越乃鹿六」をいただいたが，柔らかな口当たりの辛口で食中酒にぴったりの美味しいお酒であった。

高知県出身の私にとって，新潟県は美しい雪国のイメージ。真冬に十日町を訪れたときには，想像をはるかに超えた雪の量に圧倒された。住んでいる方にとっては大変な苦労を強いるものでもあるのだろうが，言葉を失ってしまうほどの美しさであった。その夜味わった雪見酒は，まさに「美しき雪の恵み」そのもの。夢幻の境地に遊び，気持ちよく酔ったのを覚えている。

実はこれまでに雪にまつわる句もたくさん詠んでいる。

「淡雪の 夢や旅路の 果てなれば」

「光陰の 羽音と重ねし 雪の夜や」

3.リレートーク「美しき雪の恵み」

トピック1：

「雪解け水の恵み，五泉の白く美しい絹織物」

五泉織物工業協同組合 理事長

横野恒明 氏（代理 横野弘征 氏）

五泉市の絹織物産業は，昭和40年代の全盛期には30社以上あった製造業者も令和3年の現在は3社となっている。このように減ってしまった要因は生活様式の変化による着物離れ，そして着物の生地も絹というものから他の繊維（化合繊，綿など）に変わっていったことによる絹離れがあると考えている。しかし，五泉の絹織物には雪解け水の恵みによりもたらされる美しさがある。五泉の絹織物は日本三大白生地産地のひとつとなっている。五泉以外では京都府の丹後地方，滋賀県の琵琶湖の東側のほとりの長浜の2つを合わせ三大白生地産地である。五泉は羽二重，塩瀬，絽，紗などの商品がメインで用途としては和装用と法衣用になる。

織物組合では，数年前に組合のホームページを開設した。ホームページの「シルク織物未来学校」というサイトは子ども向けに作成した。また，ラポルテ五泉のオープンに合わせパンフレットも作成した。五泉と言えば「ニット」を連想するという方がほとんどで，今後は絹織物の存在を少しずつ広めていきたい。そして，五泉の絹織物を知り，関心を持った子どもの一人でも将来の担い手になってくれたらと願っている。

基調講演（吉田 類 氏）

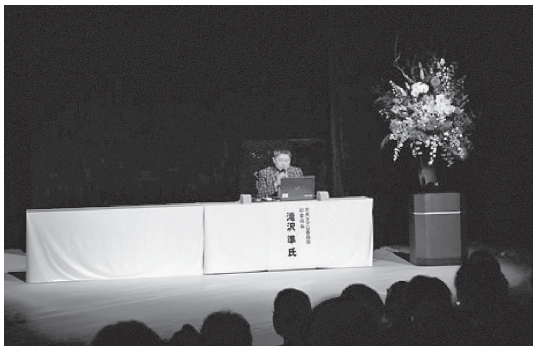
リレートーク（横野恒明 氏）

トピック２：「雪と動物のかかわり」

忠犬タマ公委員会 副委員長　滝沢 準 氏

タマ公は，昭和初期は川内村（後に村松町と合併，さらに五泉市となった）で猟犬として飼われていたメスの柴犬（越後柴犬）である。飼い主を2度にわたり雪崩から救ったことから，忠犬として知られている。あっという間に雪に埋もれ，身動きもとれない飼い主の「タマー，タマー」と懸命の呼びかけに応えるように，タマは両足を血だらけにしながらも雪を掘り続け，飼い主を助けたという。主人の命を二度も助けたタマの活躍は，日本だけでなく世界中の新聞やラジオで報じられた。こうしてタマは，忠犬タマ公として有名になり，村松公園や新潟市の白山公園，新潟駅などに「忠犬タマ公」の像がある。また神奈川県横須賀市の衣笠山公園では，山開きに合わせ慰霊祭を行っている。これは，小泉純一郎元首相の父祖父である，第十三代横須賀市長「小泉又次郎」氏が，タマ公の物語に感銘を受けたためである。現在，横須賀市には，タマ公の石碑が建立されている。その縁あって村松公園には小泉純一郎元首相の自筆の書が碑に彫り込まれている。

この様に，人々の心を打つ「忠犬タマ公」奇跡の物語をさらに広めるために，子供達への道徳教育や，地域活性化・市民の心の拠り所として，益々盛り上げて行きたいと考えている。



リレートーク（滝沢 準 氏）

トピック３：「フランス人から見た“五泉の冬”」

【五泉IT】デザインスタジオ 代表

ピエールランリ・ラヴィン 氏

五泉に来るまで雪かきの経験がなかったので失敗ばかりだった。テレビのニュースやホームセンターで，ブラシ・スコップ・ハンドラッセル・ダンプなどの道具があることを知ったが，その使い方を理解していなかったのでたくさん失敗をした。早く雪かきを終わらせたくて，スコップで遠くの場所に投げるとすぐ疲れるし，雪を多く持ち上げると手首や肩が痛くなった。長時間続けると腰も痛くなった。とても辛かったが，義父に聞いたり近所の人のマネをしながら少しずつ上手くできるようになった。雪を持ち上げる時に少し膝を下げて，腕，腰，足の力を使えば良い。雪が降り続くとどんどん重くなるので，「す・こ・し・ず・つ」やるしかない。車を出すための雪かきも最初は丁寧にやっていた。地面を出して二人が歩けるように一週間続けたが，とても疲れた。勝負ではないので，とりあえず車が出られれば十分だとわかり，その後は辛くなくなって元気が出た。雪かきのプロになった。

今は，雪かき作業が大変でも楽しく感じている。家族とコミュニケーションをとったり，近所の人と話をしたり，運動にもなる。奥さんは体力が無いからご飯を作ってもらって，私が雪かきをする。朝から元気に美味しいコシヒカリのご飯を食べられるし，お昼は少し休みながらのっぺや肉じゃが，夜は，またご飯に味噌汁など楽しく食べている。本当に全ての食材に感謝である。フランスのチーズやパンを全部忘れて，美味しいご飯のことしか考えられないようになった。

リレートーク（ピエールランリ・ラヴィン 氏）

トピック4：「雪が織りなす雪室食品の世界」

株式会社Snow Biz 代表取締役

伊藤親臣 氏

雪国では古くから雪の冷たさを暮らしに取り入れていた。その一つが「雪室（ゆきむろ）」である。電気を使わないエコな方法で食品を保存する雪国伝統の貯蔵技術である。そこでは氷点下にならない安定的な低い温度でありながら，高い湿度を保つことができるため，生鮮野菜などを鮮度よく保管できる。新たな雪の活用法として，私たち“雪のエンジニア”は雪を純国産の再生可能な冷熱資源として捉え，雪を冷房や冷蔵について研究開発してきた。北海道美唄市では雪の冷たさをコンピューターの冷却に応用したホワイトデータセンターが稼働し注目を集めている。私は雪の出番，雪の出口をもっと作る必要があると考える。つまり，雪の冷たさの価値化である。例えば，医薬品の貯蔵への応用も期待できる。一般の低温倉庫は事故や自然災害により停電した場合，低温に維持することが困難だが，雪室は電気をほとんど使用しないため，エネルギーの自立が可能である。インフルエンザワクチンや血清などは2～8℃の低温貯蔵環境が求められるが，雪さえあれば容易にその環境を実現できる。

雪を上手に利用することは食品の美味しさを引き出すだけでなく，CO_2を出さないで地域の魅力を引き出す大きなエンジン（原動力）となり，脱炭素社会の一助になると期待している。そして私たちが雪と折り合いをつけて，雪に積極的に寄り添うことで，豊かで快適な雪国社会が実現すると信じている。

リレートーク（伊藤親臣 氏）

4．おわりに

基調講演をお願いした吉田 類氏には，多忙なスケジュールを縫って，お越しいただくことができた。開演前の打合せで講演会ではお酒を呑みながら話すこともあるとお聞きし，急遽，館内の売店から五泉市産の自慢の日本酒が用意された。吉田氏がお酒を口にするたびに会場が沸き，ステージの後ろに居酒屋があるのではないかと錯覚するような，人気番組そのままの語り口に参加者は大いに魅せられた。

続くリレートークでは，五泉織物工業協同組合の横野氏は黒の羽織姿で登壇し，日本三大白生地産地である五泉の絹織物の素晴らしさを若い世代に知ってもらいたいと広報に力を入れており，ホームページでも公開されている動画を交えての講演であった。

雪崩に遭遇した主人を2度にわたり必死に助け出した忠犬タマ公の滝沢氏の話には心が熱くなった。

また，雪国生活の経験が無いフランス出身のラヴィン氏は，雪にまつわる失敗談などを楽しそうに語り，愛する家族と一緒に五泉市の生活を満喫している様子が紹介された。

最後の伊藤氏の雪室の活用については，食品だけでなく，医薬品貯蔵への展開，脱炭素社会の大きな切り札になり得る可能性が示唆され，ビジネスとしての雪利用に明るい未来を感じることができた。

最後に，本シンポジウムの開催にあたって，共催していただいた五泉市をはじめ，ご後援やご協賛をいただいた企業・団体の皆様，そして大会の準備や運営に多大なご尽力をいただいた実行委員会，幹事会，事務局の皆様にあらためて感謝したい。特にコロナ禍でなかなか先が見通せない困難な状況の中，開催をご快諾いただき，感染対策に細心の注意を払いつつ精力的に準備を進めていただいた事務局の五泉市役所の皆様に感謝申し上げる。

本文中の写真については，事務局である五泉市の方々が撮影したものを使用させて頂いた。